PDF-XChange Viewer
Click to buy NOW!
www.docu-track.com

料亭蔦茂

ご主人　深田正雄氏に聞いた、紫式部伝説

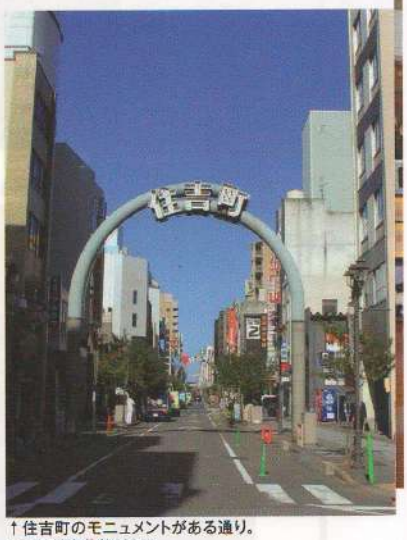
「江戸時代の傳光院の住職が伝説を作って、紫川にはまっとったかわからんよ」

↑中央にあるクリーム色のビルの場所に、旧傳光院があったとされる。左の白いビルの一階にサークルKがある。

↓料亭蔦茂　ご主人・深田正雄氏。「名古屋の旧町名を復活させる有志の会」の活動をしている。

幼い頃に見た旧傳光院

「今はありませんが、私は昭和二十六年頃、料亭蔦茂の南西にある白川幼稚園に通っていました。そこは傳光院敷地内で先代の吉田宣章住職が経営をされていたのです。三百坪くらいはあったんじゃないかな。そう広くはありませんが、奥行きが長くて七〇メートルくらいあったと思いますよ。当時はお寺ということを知らなかったけど、泉があり水が湧いていたことは覚えています。紫式部の石碑があるということも聞いていましたが、すっかり忘れていて。それで思い出したのが、中学生のとき。吉田住職が東海中学の教諭をされていて思い出したんですよ。でもね、そのときはもう傳光院は移転した後だったので、確かめようがない。千種区猪高町に移ってからも石塔はあります。泉は跡地にマンションが建設されてなくなってしまったね」



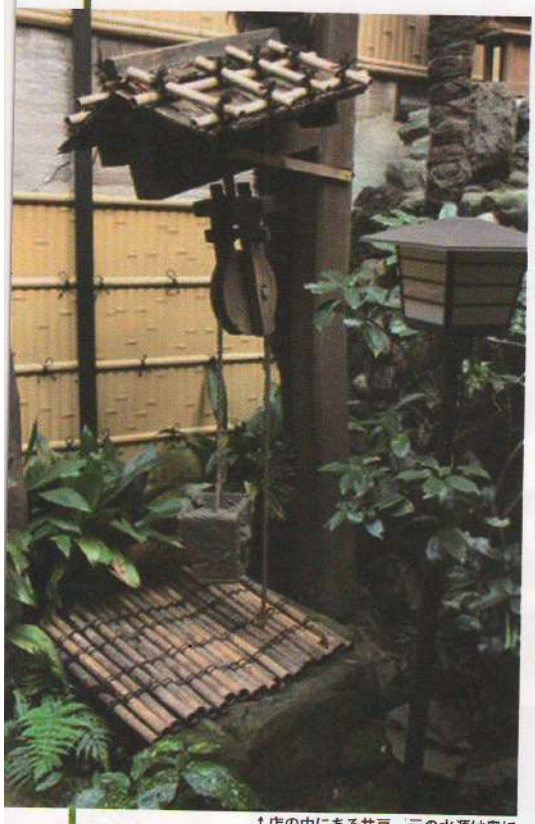
↑住吉町のモニュメントがある通り。右奥に料亭蔦茂がある。

紫川にはまる、について

「『紫川にはまる』とは、女遊びにはまる、という隠語ですよ。江戸時代後期、紫川の流れに沿った大須西（現在は一丁目）には旭の廓があってね。尾張藩主で名古屋の文化・経済を活性化させた徳川宗春が南寺町の周り三箇所に遊郭を作った。しかし、宗春の治世後は三つの郭町の維持はなかなかできないから、寺町西地域に集約させたようです。それが紫川のほとりにあった旭の廓なのです。この遊郭へ遊びに行くことを紫川に行くと言っていたそうです。今でも、はまるっていうでしょ。女遊

PDF-XChange Viewer
Click to buy NOW!
www.docu-track.com

←旧傳光院跡地の入り口とされる場所。現在は、駐車場となっており、細長い敷地だけが名残といえようか。



↑店の中にある井戸。元の水源は奥にあるが、現在では手前に移動している。

←料亭蔦茂。外観。黒色の塀が落ち着いた雰囲気を醸し出す。店内を流れる水の音に、自然と心は落ち着く。

びにはまる。だから「紫川にはまる」と言ったわけです。

ただ、なぜ紫川と呼ぶのかはよくわからない。私はね、紫式部の伝説は誰かの創作だと思いますよ。不思議なことに江戸時代、尾張藩というのは読み書きが非常に盛んで、識字率が非常に高かったことは事実ですよ。それはなぜかというと、武家が職芸として寺子屋で町衆や職人衆に学問を教えていたからです。尾張藩は六十一万石といわれていますが、それは過少申告じゃないかと。祖父が語るには、新田開拓も多く実際は三百万石くらいあったのじゃないかと言っていました。「加賀百万石」といいますけど、濃尾平野のほうが倍以上広いからね。豊かで文芸盛んで、平和な城下町ですね。町中の人は読み書きができる。お武家さんは教科書代わりに得意な「論語」を町衆に読ませるんだよ。すると、みんな親孝行して徳が上がるでしょ。みんなね、悪いことしなくなっちゃうわけ。それに、文字が読めたから、短歌や俳句を一般庶民が楽しんだ。歌でお互いの心を通わすわけだよ。平仮名文字も盛んになり、源氏物語はベストセラー。これは私の推察だけれど、源氏物語の出版も盛んになり、当時の傳光院の住職さんが自分の寺子屋をはやらせる営業シンボルとして伝説を作った。泉があって、「紫式部に仕えていた官女が住んだ」という話にしたら繁盛するだろうと考えたかもしれない。町衆は源氏物語が好きだから、それを聞けばやってくるでしょ。傳光院の住職が伝説を作って、寺子屋が繁盛して、紫川にはまっていたかもしれない。ただ、これはあくまでも深田正雄説ですけどね」

インタビューを終えて

名古屋の街には多くの歴史が眠っている。それを象徴するのが、旧町名の存在だ。深田氏は「名古屋の旧町名を復活させる有志の会」の会長をされている。名古屋は第二次世界大戦の空襲で崩壊し、くわえて町名も変わってきている。名古屋に残っていたはずの歴史は少しずつ失われてゆく。歴史を紐解く手掛かりを消さないためにも、旧町名を復活させてもらいたいものだ。

太田啓介

—所在地—

料亭　蔦茂（つたも）

住所：愛知県名古屋市中区栄3-9-27
地下鉄東山線栄駅 徒歩5分
電話：052-241-3666